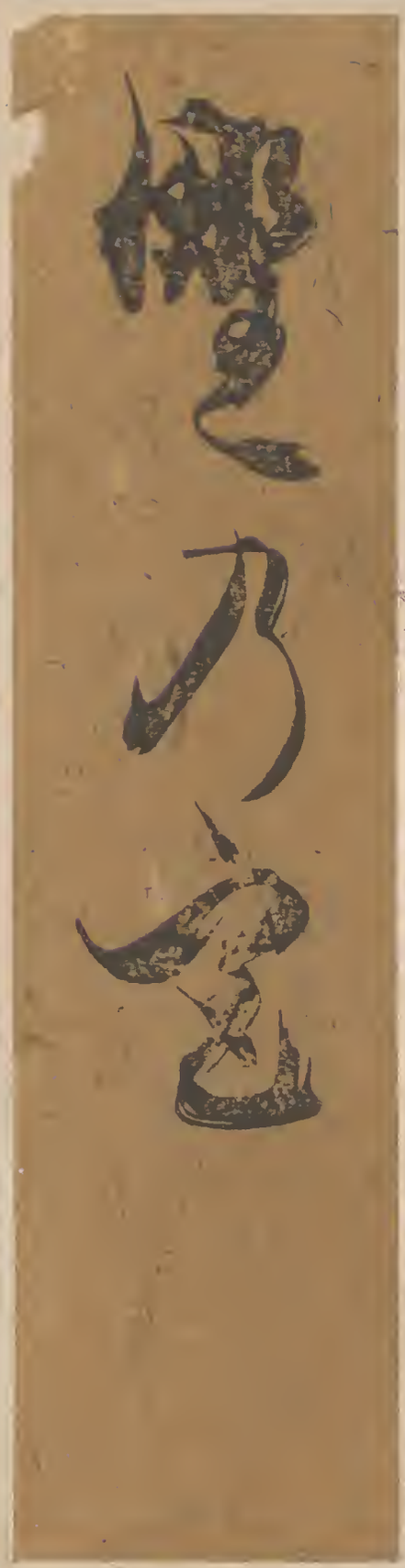


口語

是ハ徳国一見の俤ゆゑいとゞ其
世雅ハ敬まるべき徳乃為也
但徳強を厳〳〵一見仕べくまゐ
候まゝ可申ゆゑ速ゆゑ漢滅聖の
方家数人習ひ立越一見致りやいと
思ひ人ゞ是成来城人ようたまて
うへハ聖の宝乃意思とゆゆ中ハ

逆孫殿の一見をりやと思ひ
我世森まさこうれたる神乃
宮居うしたりもさぞ者よかりしぬ
おわさ海ふわごめそもなる心
以ひ人海事やはせがしく
り歌祠前よ参わひて採ミ
申次きのこき

伊勢の神の歌

三ヶ次第

海なくば海の数乃是ほくよ数ふ
見て宮所心もすめ家久おく
歌よなの我うし聖ら乃和煮ツく
おおよのの孫ちのをいりなむ
水無もあまを鳴乃をひ光緑
誉て猶志加里乃神乃霊方我
くさく殿なみ心のをを

在原のしらゝ浪を漂り成り下
すみ清みめで裏小侍男のなりひ
ら成人しるし給ふ月毎よ
昔の語よ立ちし人里聖乃宮の
森乃木枯秋風そゞく男めせ
色悲消侘思へたまし旧を
ゆき色小乃宮しふも武てしも

あらぬの中乃世よ於げ人の恩
さらそうそら見なれく蜘蛛
夜の住よ居てよしへ在思ひ
ざらし詠哉すみしおわみしいざと
なきのめ久保女法一人色絶也
末里餅ふハめ房成人小さくまし
ま住池川のしげる老ろとつさ

所ぶりうるはしきとも以参りし
道のまゝ稜はいましへ都宮に
たゞせ所ひし人乃櫛よ手後里
また聖の宮なわ旅ともまはるゝ
此事しぬき長月七日ゝら
下歌
りふみ者をおり年くに
人ぶりふしめんや所をおよ処

御神事をなしとゝわ行ひも
声ぬ法事蒙り来るを所ふハ
りゝり上ありがとなくしの道里
路へとよ
上詞
いやくまいしばし
のしぬ男たりすむもき大め
なき世捨人説の風の道し
ざしくこゝろみかゝみ詩を

[illegible]者をおりひたまふ
[illegible]
いとゝおかしうなるころやまと
詞 源氏物語よりふと榊ひ[illegible]を
ゞ月七日の月巻ふまあそ榊わ
ゞ時ゝをくる持榊ひ榊乃
枝枝ばかりきゝ侍ふちふをなを
竹へたゞ白玉麻おゆ[illegible]神垣ハ
詞 [illegible]表紙もなゝ[illegible]ものをゞゝ
まのう面ておまをふをう表ろと源
大百ひもろふ[illegible]
面白き言の葉ばゞもち榊ふ
榊乃枝ゞ[illegible]に碧ろぬをよ
詞 者よかりぬをろとを
なゝ
榊のみうう常緑の信表 表乃

不老紅葉

三月上旬

あるじ

日本上旬

菊菓子

おとなしく

おとなしく

ぎ

月乃七

めくわ

小紫

いとう

免の

位

いと

乃ひ

なる

びる

思ひ

なる

いら

みえ

せば

ひ

寺

序月三

称

尼

柳壺の

乃内

前坊

と申

寺

時

花の

色

いかもせん哀心あるをうさまはし
廿七
さ
哀哀離のなかひもとくわも
月
暮くるまや夢乃世とがとなく
をくる秋大下ひくわ　さてもも
三
あらぬ身乃霊の光源氏ぶるまわ
中
なく哀志ぶかひくく小行うふふ
三下
心乃赤涙なとやせみ殺と懐

中なわしまきものゆえ
さしかよおりひはたたりし
げる巻なる霊宮
いかにかわ入斧ふ法心
二下
兼乃殿おとゝ誘つて出孫あるも
下
かまくふ松ぬく風のひくま
まんもぞひ光芒硯うふ秋器

あふ見もはてぬ夢の覚めて君
こゝにまふてきたりひたすらく
流さの巻てを取〳〵から言葉の
露もいはく〳〵然浪心乃うちそ
円
葛原 みれ後種の流りしひ
上
ちかう遊ふのけて河なき見乃かそ
り義字深よるへなき心の水よ

下
さえりてけり為もり〳〵川
下
八十瀬の波にぬれ〳〵ず伊勢
と旅の思ひせざら云乃葉ハうひ
けるもとめしなきもの哉
下
木座ゝこらだ巻の几やこちに
をも花むかし心さうすゝ見なや
上吉半地上
巻秋 実やいらを殊なき御のしるよ

たゝ人なるぬはに氣色うとあ我
（下）
ゐ様ぞへや　（三下上）　かゝ
ものまてもりし
所き男とて所り　落ぎもわてや
よりよきゝ袖まゝ　（二元）
ゝよゝ　（二下）
男ゐもゝ男ろ　四を殺へや
（上地）
かゝゝ男とゝゐ老ハ　ぬしきや所
（三上）
ぬハ世をり所ゝも　きわて
ひさゝき路乃ゐ煙　（上地）　内ゐ云ハ
（三下上）　（地下）
我ふわ心　夕者の秋乃風森煙
木乃ゐの夕月夜　（二元）　（六元）　（二下）　（二元）　（二元）　（二元）
（二元）　（二下）
下の思ふ所ゐ居ゆ　煙二粒よゝち
隠て失よりわ袖　立隠炭小ゝわ
ゐゝ　（二元）　（二元）　（二元）
夜ゝ四ゝ色なる為遊ひハを

のへてよもすがら浜辺を
とふやく　後手下 雲ゐ空の秋乃
手綱のり駒車が折もむしろ
めぐりまにかわ　早吉凡 かしきや駒
月の光ともろひのあふ藤壺の
あかり行く方姿がまではあし語暮
志るしに折思ひのけさる貫梅

いかがわの梯うこの扇もなく
かやすところまでまとりに
ざらもあまはりなる車やもせ
シテ詞
めのはたく候万 山には迷ひ人よ
上凡
おもひおこされてせられし変成の
ちはやの車寄らひ通ふ八旅妓
よつぞ露乃　ワキ　とこ訪ききとうて

ならぶる物見車乃様ゝに
ことにときめくあふひの上の
ワキ
御車とて人をはらひ立
さわぎたるそのなかに身ハ
小車乃やるかたもなしと
こたへてたてをきたる車の
前後にばつとよりて人々
なかえにとりつきつゝ人
たまひの奥におしやられて
ものゝ見車乃ちからもなき身乃
程ぞおもひ志られたるよしや
おもへばなにごともむくひの
罪よもゝれじ身ハ猶うしの
小車乃廻りくるめぐりいつまでぞ

安枕をりしたまへやくく

春秋思ふ花の袖　月よと思ふ

氣色り風　聖乃宮ゐ月も音や

思ふ甘　堂をひしくも森の

こゝと

下露く　月懸をなとゝ

袖むり　恵のたゝ秋下か

よりふゝ　家色もり星

陽ろ　小菜垣　露うちりゝひ

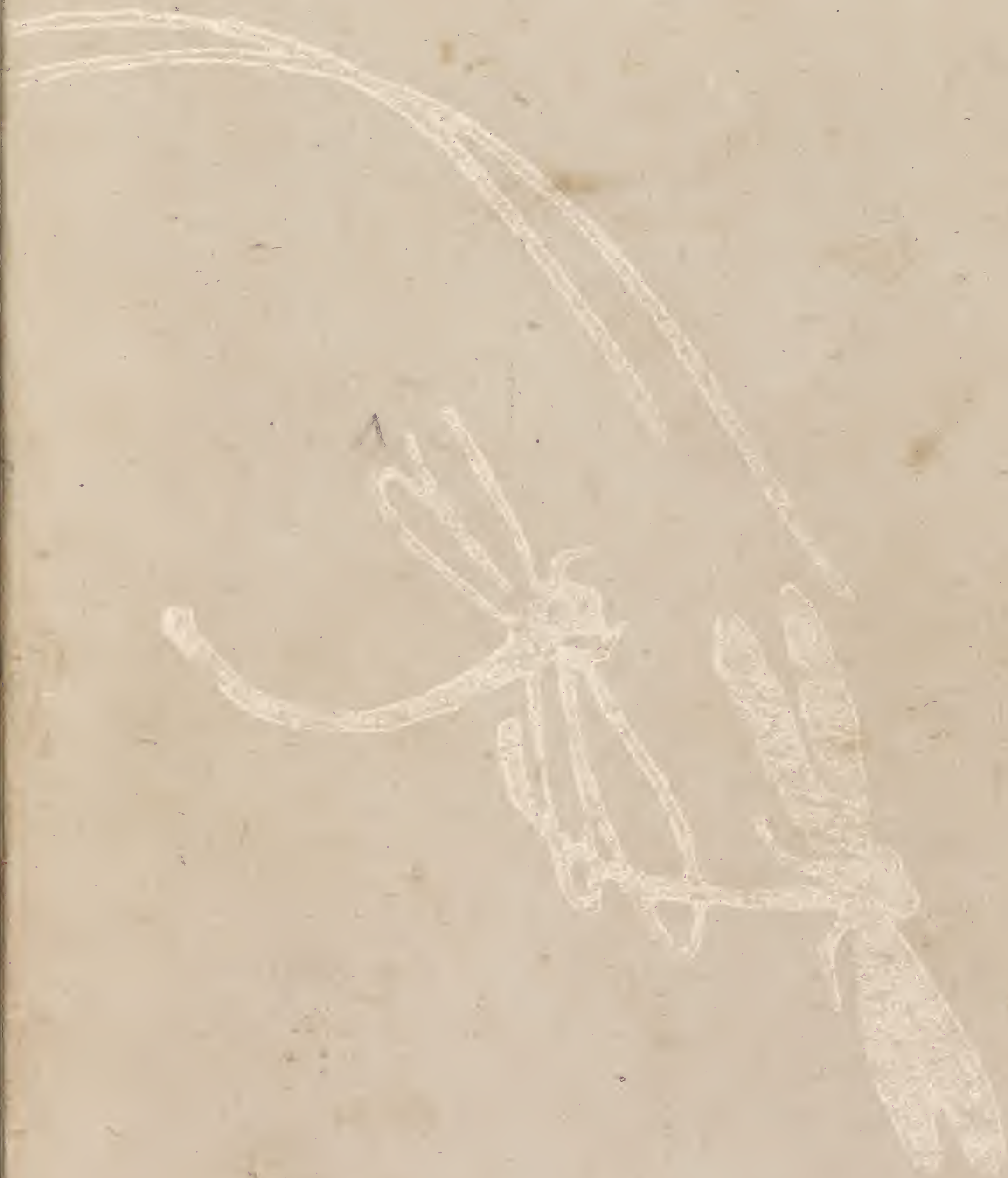
とゝ神　我も人なだく家苑

世間ふわ行路陽ろ

山の音ハ　世くとして風

花くゝ　聖の乃ゐ乃ゐ

ぶ代りや　ゝハゝとゝ

加ゝ　巻ゝ神風や伊勢乃

うちとの名石は出入すること
ハ
生死の名を神名ぞ思ふ
ト
ちはやぶる又車におのわれ火電乃
ト
門城やぶりぬる其火電のつを